

「～たまま」の意味用法

－ マイナスイメージの出どころをめぐって －

丹 保 健 一

A Study of the Meaning and Usage of “～tamama” : Where Does Its Negative Image Come from ?

Kenichi TAMBO

0. はじめに (目的、概要)

「結果を表す動詞」＋「たまま」において「たまま」はマイナスのイメージを伴うとする指摘がある。

本稿は、このような指摘が正しいのか、また、どのような条件においてマイナスのイメージが生ずるのかを明らかにしようとするものである。

本稿で扱う「たまま」は、「v1-タ ママ v2」の形式を持ち、前項と後項が併存する文を主たる対象となる。「たままに」「たままを」「たままの (連体修飾)」は対象とはしない。たま、「られたまま」、「ていたまま」、「せたまま」等も対象としない。

1. これまでの指摘

(1) 森田 (1989) は、「まま」の意味を「事態・事柄に変化が加わらずにある状態」とし、次のように三つに分類している。

- ① 事の成り行き通りになること、対象の状態につれて状態が定まること。
- ② 対象が示す状態に手を加えないこと。
- ③ 対象そのものがその状態であり、変化をしていないこと。

多くの辞書がこの3分類を採用している。

また、「マイナスのイメージを伴うケースについては、次のような指摘に注目したい。

「テレビをつけたまま眠っている。」「船が帆をおろしたまま停まっている。」「帽子をかぶったまま講演を聴いている。」－ 中略 － 「本を開いたまま眠っている」

これらの例の多くは、以下で述べる行為や状態の場としてふさわしくない状況が展開していること、不都合だ、好ましくない事だという観点でとらえている。本来なら当然、以下の行為や状況に合わせて変えていくべきなのに、それを変えずに原状を持続していくという状況の不釣り合いを非難する気持ちである。

(2) 矢部 (1991) は、「ママ」を次のように5つ分け、A、Bについては更に細かに分けているが、ここではAについてのみ詳しく紹介しておきたい。

(A) v1-タ ママ v2

A-1. 前項と後項が併存する。(「ままで」の形式可) v1は結果動詞

A-1-1. v1が動作主体の姿勢や様相に関わっている

- A-1-2. v1 が対象の様相属性を表す
 - A-1-3. v2 の動作中の外的状況付帯状況、付帯状況をv1が表現
 - A-2. 前項と後項が併存しない。(「ままで」の形式可)
 - A-2-1. v1 と v2 が時間的前後関係にある
 - A-2-2. 連用中止に近い、
 - A-3. 「ままに」は可、「ままで」の形式は不可、連用修飾でないものも、v1 は知覚認識動詞や発話要求動詞が用いられる。
- (B) v1-ル ママ v2
- B-1.
 - B-2.
 - B-2-1.
 - B-2-2.
- (C) v1-ナイ ママ v2
- (D) A (イ/ナ) ママ v
- (E) Nノママ v

本稿では、「タママ」を中心に考えているので、「タママ」に関する指摘を中心に見ておくことにする。矢部は、A-1. 前項と後項が併存する場合は、V1は結果動詞であることを指摘し、A-1を更に、上に示すように3つに分け、A-1-1. のv1が動作主体の姿勢や様相に関わっていること、A-1-2. のv1が対象の様相属性を表していること、そしてA-1-3. のv1は、v2の動作中の外的状況付帯状況、付帯状況を描いているとしている。そしてさらに「A-1の『まま』に共通していえることは『状態の不変化』ということである。状態の不変化に着目し、これをとりたてるということは、それが普通ではない、自然ではないということである。」「前項で示される静止状態が続くことの不自然さを述べることに重点があるようだ。」等を指摘している。

また、A-2に関しては、「二つの事態が共存することはな」く、「時間的な前後関係が存在する」とし、「話し手がV1の後に予期していたことが当然起こるべき事態が起こらないことに対する異議申し立ての気持ちが『まま』の構文に表れる。」と述べている。

分類基準としての時間の前後関係など、疑問を感じる箇所も見られるが、「状態の不変化に着目し、これをとりたてるということは、それが普通ではない、自然ではないということである。」等の指摘は、先に示した森田(1989)と同様参考にしたい指摘である。

(3)(山田2005)は、「「～たまま」も結果が残る動作動詞と共に用いられますが、好ましくない状況であるというニュアンスを含みます。」としている。

常にマイナスのニュアンスを含むと言えるのか等については、本稿の主たる検討課題である。

2. 「まま」が接合する語(前接語、後接語による)

考察に入る前に、「まま」に前接する語と、「たまま」に後接する語によって、その結合形式を整理しておきたい。なお、用例は、断りのない限り『新潮文庫の100冊』に収められている、昭和33年以降の日本人作家の作品によった。(用例出典一覧参照)

2- (1) 「まま」に前接する語

『新潮文庫の100冊』からの検索によると、次のような接合が見られる。

動詞（ル形）＋まま
動詞（タ形）＋まま
形容詞（い／き）＋まま
形容動詞（な）＋まま
助動詞（ヴォイス、アスペクト、否定「ない／ぬ／ん」、らしい、たい）＋まま
助詞（の、が）＋まま
その他（きまま、ままよ、ままならない）

本稿で主として扱うのは、これらの語形の内、「動詞（タ形）＋まま」である。

2－(2)「たまま」に後接する語

これも『新潮文庫の100冊』によるものである。「たまま」に後接するものに限定して示しておく。

「たまま」、
「たまま」
「たまま」で（状態）
「たまま」に
「たまま」を
「たまま」の（連体修飾）
「たまま」ダ（断定；「である」等の語形を含む）
「たまま」らしい

本稿において扱うのは、主として、「たまま」、「たまま」「たまま、（状態）」「たまま、（状態）」である。

一般には、「たままに」も対象としているようであるが、「たままに」の接合で表れるものは、「たままに＋なる／する」のような形式のものか、次に示すようにすでに古風な言い方を除けば、「たまま、」と置き換えることが出来るものである。

- (1) 黒い雨. TXT: 道ばたの家は傾いたり崩れたりして、傾いた【まま】に家のまわりを片づけて、障子紙のない歪な障子を立てかけている家があった。
- (13) 孤高の人. TXT: しかし加藤は、別にあばれもせず逃げ出しもせず、彼等が宵のネオンの町の中を、あっちによろけ、こっちによろけ、同じような風体の若者たちと声を交わしたりしながら、巷へ踏みこんでいくなかに呑みこまれた【まま】についていった。
- (18) 花埋み. TXT: ぎんは相変らず月に二、三度は熱を出し、出すと四、五日は寝た【まま】に過した。

3. 問題の所在

これまで、「たまま」は、「結果動詞＋タ＋ママ」などにおいて、マイナスイメージを伴うことが指摘されている。しかし、このような条件が伴えば総てマイナスイメージを伴うといえるのであろうか。「結果動詞＋た＋まま」の形式であっても、あるいは前項と後項の動作が併存する場合であっても、マイナスイメージを伴わない例が見られるのではないだろうか。不自然さのイメージを伴わない例がある

のではないだろうか。

また、不自然さや、マイナスイメージを伴わない例があるとすれば、どのような条件下において、不自然さや、マイナスイメージを感じているのであろうか。さらに、「たまま」たマイナスイメージを伴うとの指摘にそれほど違和感を感じないのはなぜなのだろうか。このような素朴な疑問から始めていきたい。

3 - (1) マイナスイメージを伴わないと思われる「タ+まま」の例

- (400) 一瞬の夏. TXT: すると理亜は嬉しそうに笑い、両手を内藤に預け【たまま】、音楽に合わせて体を動かすはじめた。
- (642) 孤高の人. TXT: 技師や技手たちは、設計図に向っ【たまま】で、よそ見をする者はいなかった。
- (709) 太郎物語. TXT: その時に、我々は自分の殻を破って、しかも自分を保つ【たまま】、より広大な社会へ踏み出せる。
- (778) 世界の. TXT: 「あなたがそう求めるのならね」と彼女は微笑みを顔に浮かべ【たまま】言った。

これらの例は、マイナスイメージを伴わず、むしろプラスイメージを伴うものである。これまで指摘されてきた、動作の結果の状態が継続していると思われる例であり、また、前項と後項とが併存している例でもある。

3 - (2) マイナスイメージを伴う「タ+まま」以外の「まま」

マイナスイメージを伴うのは「タ+まま」以外の「まま」においても見られることは言うまでもない。しかし、次に示すような接合形式を持つものについては、マイナスイメージを伴う伴わないといったことは問題にされてこなかった。しかし、収集した例文を見る限りにおいては「~ナイ+まま」などは、その殆どがマイナスイメージを伴うのである。参考として、「タ+まま」以外の形式でマイナスイメージを伴う具体例を挙げておこう。

- (6) 一瞬の夏. TXT: しかし、試合は内藤がファイターとしての本領を発揮できない【まま】に終わっていた。
- (25) 花埋み. TXT: 乱獲の故とも、海流の変化のためとも言われたが、有効な対策もない【まま】、「いまに来る」という期待だけにずると年を重ねていた。
- (5) 二十歳の. TXT: こんな幼稚な【まま】で「大人」にさせてしまった社会をうらむなあ。
- (38) 人民は弱. TXT: この【まま】だと、やっかいなことになる。
- (755) 花埋み. TXT: 「ぎん殿が不治の【まま】田舎に閉じ籠られるのは私としても忍びがたい。
- (95) 黒い雨. TXT: ケンボナシの実実は青い【まま】地面に落ちているのを二つ三つ拾って、正男のリュックサックの小袋に入れたそうだ。

4. 「タ+まま」とマイナスイメージ

「タ+まま」にマイナスイメージ伴わない例のあることは先に示した通りである。しかし、「タ+まま」が、マイナスイメージを伴うと感じることや、不自然であると感じる事に対してそれほどの外的な指摘であるとも思わないだろう。そうであるからこそ、「マイナスイメージを伴う」と指摘されてきたのであろう。しかし、実際の例を見ると、明らかにマイナスのイメージを伴うと思われる例がその大部分を占めるとは言えないようである。以下、なぜマイナスイメージと感じやすいのかを含め、イメー

ジの出どころについて探ることにしたい。

4- (1) 「タ+まま」が伴うイメージについて

確かに、「タ+まま」がマイナスイメージを伴うもの、及びその可能性を持つものまで入れれば、その例はかなりの割合をしめよう。マイナスのイメージを伴うものとしては次のような実例がある。

(331) 二十歳の.TXT: きのうは徹夜するつもりが、素裸で窓をあけた【まま】、四時ごろ寝てしまった。

(371) 新橋烏森.TXT: 「この頃、残業をやっていく諸君の中に、ガス湯沸器の火をつけた【まま】帰ってしまう人がいる。

(474) 女社長に.TXT: 純子は、珍しくスパゲッティを食べ残した【まま】、その喫茶店を後にした。

(506) 花埋み.TXT: あいは髪をふり乱した【まま】顔をあげた。

これらの文は、「多くは、以下で述べる行為や状態の場としてふさわしくない状況が展開していること、不都合だ、好ましくない事だという観点でとらえている。本来なら当然、以下の行為や状況に合わせて変えていくべきなのに、それを変えずに原状を持続していくという状況の不釣り合いを非難する気持ちである。」(森田1989)「むしろ、前項で示される静止状態が続くことの不自然さを述べることに重点があるようだ。」(谷部1991)の指摘につながる例であると言えよう。

そのマイナスイメージが、「たまま」によることは、これらの用例を以下のように「～て」で置きえると、もはやマイナスイメージを感じることはないことから分かるだろう。「～て」であっても、とりわけ「てしまった。」が文末にあるものには、文全体に対してマイナスイメージを感じてしまうことは言うまでもない。しかし、そのマイナスイメージが、「～て」によってもたらされるとは感じないであろう。

(331) 二十歳の.TXT: きのうは徹夜するつもりが、素裸で窓をあけて、四時ごろ寝てしまった。

(371) 新橋烏森.TXT: 「この頃、残業をやっていく諸君の中に、ガス湯沸器の火をつけて帰ってしまう人がいる。

(474) 女社長に.TXT: 純子は、珍しくスパゲッティを食べ残して、その喫茶店を後にした。

(506) 花埋み.TXT: あいは髪をふり乱して顔をあげた。

「スパゲッティを食べ残して、その喫茶店を後にした。」(「スパゲッティを食べ残した。そして、その喫茶店を後にした。)」と「スパゲッティを食べ残したまま、その喫茶店を後にした。」を例に取り、「～たまま」と「～て」との違いを更に詳しく見ておこう。

「スパゲッティを食べ残し(て)、その喫茶店を後にした。」と「スパゲッティを食べ残したまま、喫茶店を後にした。」とを比較すると、後の文は、「後にした」行為が「食べ残したまま、」の状況下において行われたことが前面に出ることになる。言い方を換えれば、「～たまま」が取り立てられていることになる。「～て」の場合は、時間の経過とともに行為が起こっていることを示すに過ぎない。一方、「タ+まま」では、「まま」の意味が「事態・事柄に変化が加わらずにある状態」(森田1989)とすれば、そのような「事態・事柄に変化が加わらずにある状態」下で行為が行われたことに対する評価が生まれることになる。その評価は、「スパゲッティを食べ残し、事態・事柄に変化が加わらずにある状態でその喫茶店を後にする」ことの評価である。

「スパゲッティを食べ残したまま、その喫茶店を後にした。」の文に対しては、普通の状況であればマイナスのイメージを伴うであろう。しかし、「その状態を変更しない」ことをマイナスと感じなければ

ば、例えば、「残したスパゲッティをかわいがっているかわいそうな野良犬に食べさせるために」であれば、「スパゲッティを食べ残したまま、その喫茶店を後にした。」ことにマイナスの評価することはなく、マイナスイメージを伴うと言えなくなる。分かりやすい例で言えば、「彼女は微笑みを顔に浮かべ【たまま】言った。」であれば、不自然さは感じられず、プラスイメージを伴うのである。

他の例も見ておこう。

(429) 世界の.TXT: 私がTVのヴォリュームをあげた【まま】しのび足で台所にいってみると、案の定男は黒いビニールのバッグに頭骨をしまいこもうとしているところだった。

この例では、「たまま」の状態にプラスやマイナスのイメージを感じることはないだろう。「ボリュームをあげたままの状態で行くこと」が主体の意図であるからである。主体の意図が無ければ、「ボリュームをあげたまま出て行った。」は、不自然、不都合な状態であると判断され、マイナスのイメージが抱かれることになろう。そして、そこには「普通であれば不都合であるがあえて」といった意味合いを感じるようになる。

それでは、そのままの状態で行為をすることが動作主体の意図であれば総てマイナスイメージ、あるいはそのほかのイメージを伴わないのであろうか。

(429) 世界の.TXT: 私がTVのヴォリュームをあげた【まま】しのび足で台所にいってみると、案の定男は黒いビニールのバッグに頭骨をしまいこもうとしているところだった。

この文において、「TVのヴォリュームをあげた【まま】」その場を離れることは、普通ではないがそれを主体が選んだということである。この場合、評価はその選択意図に向かうことになる。「まま」であることを意図した場合とそうでない場合とではイメージのどこかが異なるのである。その選択意図によってはマイナスイメージとなることも生ずることになろう。

例えば、「彼は首を締めつけたまま、離そうとはしなかった。」(内省文)や「借りたまま、返そうとはしなかった。」(内省文)のような場合は、動作主体の意図的な行為であってもマイナスイメージが伴うことになる。動作主体の意図的な行為であっても、それをどのようにとらえるかによってイメージは異なるのである。

上記に挙げた、動作主体の意図の他、イメージに影響を与えると思われる要因の一つに、動作の意志性と無意志性が挙げられるように思われる。これについても見ておくことにしよう。なお、動詞の意志性と「たまま」であることを意図しているといった場合の意図とは全く異なることを断っておきたい。

(239) 〈孤高の人. 新田次郎. 1969〉: 雪雲の底の平面は、鉛色をした海と平行した【まま】遠のいて行って、水平線との間に、くっきりと一条、青空を残して終っていた。

このような文の「たまま」に、マイナスイメージを感じることはないであろう。これは、「海と平行した【まま】遠のいて行く」くことが何らかのマイナスイメージを伴うような状況であると考えられないからである。書き手が、読み手が、「たまま」にマイナス評価を込めることが出来ないのである。しかし、だからといって、無情物が主体であることや、v1v2が無意志動詞であることがマイナスイメージを生じさせない要因であると断定することも出来ない。というのは、無情物が主語であっても、「v1+たまま+v2」の状況が変更可能であるという前提があれば評価は生じうるのである。「ドアは閉じたま

ま(で)、開かなかった。」は、文脈によってはマイナスイメージが生ずる。しかし、状況の変更を想定出来ない場合は評価は成り立たないと考えられる。つまり、そのような状態を変える事が出来る可能性があるという前提が根底にある事が、マイナスイメージを生じさせることを可能にしていると考えられるのである。それは、描写的になればなるほど評価が入りにくいことにも表れているように思われる。

それでは、動作の意志性や動作主体の有情性・無情性、そして、動作動詞の種類が、マイナスイメージといった評価と全く無関係なのであろうか。

- (295) 太郎物語. TXT: 長いスパイクをつけた【まま】、タイツを破かずにめぐるのは、これでかなりの熟練を要するのである。
- (330) 若き数学. TXT: 私はバフィーと並んで砂の上にうつぶせになった【まま】、砂浜を飛び回ったりバレーボールに興ずる若い男女を眺めていた。
- (331) 二十歳の. TXT: きのは徹夜するつもりが、素裸で窓をあけた【まま】、四時ごろ寝てしまった。
- (371) 新橋烏森. TXT: 「この頃、残業をやっていく諸君の中に、ガス湯沸器の火をつけた【まま】帰ってしまう人がいる。

はじめの二つの文は、主体の状態を前項が示している。それは、主体が後項の行為を行う態度として評価される。それに対し、後の二つの文は、他に対する働きかけの結果の状態における行為(後項)を示していることになる。評価の度合いについては、どちらの場合が責任が問われるかについては、「靴をはいたまま、入ってきた」と「窓を開けたまま寝入った」を比較しても分かるように、状況によるとしか言えないように思われる。

それでは動作が無意識の場合と有意意識の場合とではどうだろうか。動作に意志があるのであり、その行為を責める気持ちには差異が出るのが予想できるのであるが、実態はどうだろうか。v1、v2の一方が無意志的な行為であると考えられる場合について見ておこう。

- (444) 太郎物語. TXT: 太郎が呟いたのを、五月さんは、ごく一般的に、知らない二人連れに対する感想だと思っ
たらしく、後れ毛を顔に散らした【まま】、困ったように、心持ち悲しげな表情で、眩しさに眼を細めな
がら見つめていた。
- (240) 孤高の人. TXT: 彼は、机にかじりついた【まま】、こきざみに身体を震わせていた。
- (683) 世界の. TXT: 街の空は太陽を見失った【まま】夕暮に向おうとしていた。
- (572) 孤高の人. TXT: 二人の影が障子にうつった【まま】動かない。

v1が無意志であっても、v2が有意志であれば、v2が無意志であっても、v1が有意志であれば、一般的に行為の選択が可能であると可能であり、状況の不自然さの責任は動作主体に向けることが可能であろう。全体としては、そのような状況を変える可能性を動作主体が持ち、かつそうしない(かった)場合に主体に対する責めといった思いが生ずることになる。しかし、(683)のような擬人的なものや、(572)のように主体が有情物でなく、その状況に不都合がない場合は、動作主体を責める気持ちや動作主体に対して好ましくないといったマイナス評価は出にくい。ただし、動作主体に対しての責めの気持ちが生じなくても、さらに言えば、漠然としてマイナスのニュアンスがなくても、普通ではない、不自然であるといったニュアンスを伴うことはあり得る。

v1v2の同一動作主体が有情物で、かつv1v2が共に無意志動詞である場合はどうであろうか。例えば、「気を失ったまま、死んでしまった。」(内省文)などにおいては、「気を失う」ことも「死ぬ」こ

ともいづれも動作主体には一切責任のない事である。対応のしよりの無いことである。無意志ということから言えば、「危険な崖から海に滑り落ちたまま、死んでしまった。」(内省文) などような文も考えることが出来る。つまり、先に触れた、状況を変化させることが出来ない前提がある場合につながるものと思われる。しかし、このような場合であっても、つまり、前項後項の動詞が共に無意志動詞であっても、動作主体が前項と後項による状況を変化させうる可能性があった、またはあると判断できれば評価は変わってくる。「危険な崖から海に滑り落ちたまま、死んでしまった。」の場合において、崖から滑り落ちる遊びを行っていたの事故であれば、その状況を変えることが出来たのであり、評価は変わってくることになる。それでは、この文のマイナスイメージはどこから生ずるのであろうか。それは、「崖から海に滑り落ちたまま、死んだ。」(内省文) と「危険な崖から海に滑り落ち(て)、死んだ。」(内省分) とを比較することによって明らかになろう。つまり、文全体がマイナスイメージを伴うため、あたかも「たまま」がマイナスイメージを伴っているように感じるだけなのである。それは、両文にマイナスイメージの違いをそれほど感じないことから推測できよう。

しかし、不自然さは感じないものの、話し手・書き手が持った予想や期待とは異なる事態が、つまり想定した話し手・書き手が持っているあるべき状態とは異なる事態が生じたという意味合いは含み得るように思われる。文に即して言えば、「危険な崖から海に滑り落ちてもそのままでは死なない。」といった予想であり期待である。

これまで述べてきた様々な「たまま」に関わるイメージ・ニュアンスを整理すると次のようになろうか。

- A 1. これといったイメージを伴わない「たまた」
状況を変更することが想定出来ない場合
- B. ある種のイメージを伴う「たまま」
 - b-1 「たまま」であることが、話し手・書き手の予想、期待と異なる。
 - b-2 「たまま」であることが普通ではない、不自然である。
 - b-3 「マイナスイメージ」または「プラスイメージ」または「中立的イメージ」

5. 「～タ+ママ+ダ」について

これまでの考察を補うためにも、「v1+タママ+v2」の形式以外のものについても見ておくことにしたい。特に、マイナスイメージを伴いやすい、「v1+タママ+ダ」を取り上げておきたい。

5- (1) 「～タ+ママ+ダ」(「タままだ。」「タままだった。」)

具体的には次のような例を言う。(「タ+ママ+だ。 / だ。」の形式を持つ用例は、『新潮文庫の100冊』の昭和33年以降の日本人作家による全作品から検索した結果37例あった。全37用例は資料(用例一覧)を参照されたい。)

- (1) 世界の.TXT: 耳たぶには例の金のイヤリングがついた【まま】だった。
- (2) 孤高の人.TXT: 二階の彼の部屋の窓が開いた【まま】だった。
- (3) 世界の.TXT: 台所のテーブルの上には獣の頭骨を置いた【まま】だった。

これらはいずれもマイナスイメージを伴うと感じやすい例ばかりである。これらは、「v1+タ+ママ

+v2」の形式を持つ文に比べ、はるかに高い割合でマイナスイメージを伴っていると言える。何がどのようにさせているのであろうか。

まず考えられることとして、v1（の結果状態）が何の変更もなしに続くことは普通あり得ないことであり、不自然さが伴いやすく、そのことがマイナスに評価されることが多いことにつながっていることがあろう。つまり、行為の後に続くであろう次のステップが示されない表現であることがマイナスと感ぜられる大きな要因であると言えよう。そして、「v1+タ+ママ+v2」では、v1の（結果）状態は、一時的な状態、つまり、v2の行為が行われている間の状態であり、必ずしも長い期間の状態でなくても可能であることも関わっていよう。また、動作主体の意図的な行為であるか否かも理解しがたい表現であることも一つの要因であると言えよう。文脈によっては、可能な場合もあるだろうが、少なくとも一文のみでは難しい。もちろん、一つの状態が長く続くこと事態にマイナスイメージがあるわけではない。「多くのいじめを経験したにもかかわらず、彼は素直な善良なままだった。」（内省文）「そこだけが懐かしい昔のままだった。」（内省文）一方の「v1+タ+ママ+ダ」の場合、ある行為があった後の状態がそのまま続いているということであり、その後何もないことが取り立てられているのである。その状態で放置されているといった感じ方をするのである。そしてさらに、実際の例を見ると、v1の（結果）状態が好ましい状態であることが言えないものが多いようだ。v1の（結果）状態が好ましい状態であれば、プラスイメージとなることも考えられようが、実際の例を見ると、明らかに好ましいと思われる例は見あたらない。

それでは、「彼女はいつまでも愛されたままだ（った）。」（内省文）「彼は、ずっとチャンピオンベルトを保持したままだ（った）。」（内省文）のような例はどうだろうか。「愛される」ことや、「チャンピオンベルトを保持する」ことは好ましいことであることは誰も認めることであり、「愛されたまま、死んでいきたい。」「チャンピオンベルトを保持したまま、引退した。」などにおいては、プラスのニュアンスを感じるであろう。つまり、そのような状態で他の行為をすることが好ましい状況はあり得るのである。しかし、「タ+ままだ+ダ」の場合、それほど単純ではない。実際の例を見ておこう。

(12) 聖少女.TXT: この夏、ぼくはすでに何度も泳いでいた。六月のなかばから空はつややかに禿げあがった額のように晴れあがっ【たまま】だった。太陽は熱い息を吐きつけ、フライパンのなかよりも耐えがたい都会の真夏がはやばやとやってきたのだ。

前後の文を読むと分かるように、(17)の「たまま」はマイナスのニュアンスを伴っている。しかし、「空は晴れ上がったままだった。」は、運動会など晴れ上がることを期待している場合などにおいては、プラスとなりうるように思われる文であるが、実際にそのような使われ方が、「タ+ままだ+ダ」がプラスイメージを伴うと考えられる例は見つからないのである。内省文として想定しても、単純にプラスイメージを伴うと感ぜられないのである。

また、「たまま」に断定の「ダ」が後接することにより、「ままだ」の取り立て度が強くなり、マイナスイメージを伴いやすくしている要因であると考えられることも出来よう。

このように考えてくると、「～タ+ママ+ダ」がプラスイメージを伴うことはきわめて考えにくく、「たまま」はマイナスイメージを伴う」という感覚は、「たままだ（った）。」が持っている「動作の結果状態に手を加えないで／放置して」といった意味合いを想定しているとすれば分かりやすい。

6. まとめ

「タ+ままだ」はマイナスイメージを伴うのかについて様々な視点から検討してきたが、そのまとめとして、とりあえず次のことを指摘しておきたい。

- (1) 「たまま」(v1+タママ+v2) は、プラスのイメージを伴うことがある。
- 孤高の人. TXT: 技師や技手たちは、設計図に向っ【たまま】で、よそ見をする者はいなかった。
 - 太郎物語. TXT: その時に、我々は自分の殻を破って、しかも自分を保つ【たまま】、より広大な社会へ踏み出せる。
- (2) 「たまま」は、その状態をとりたてていうのであり、普通でない状態を言うことが多い。そのため、不自然であるのイメージが強く、マイナスのイメージを伴いやすいといえよう。但し、そのような不自然さがむしろプラスであれば、必ずしもマイナスイメージとならない。
- (3) 「たまま」のプラスイメージが表れる一つに、動作主体が意図的に一般的には普通ではない状態下で行うことを選択している場合であって、かつ、そのことが全体として聞き手がプラスとして受け入れることが出来る場合がある。
- (4) 「たまま」は、プラスマイナスといったイメージのみならず、予想外、普通でない、不自然といったイメージさえ伴わないこともある。
- 〈孤高の人. 新田次郎. 1969〉: 雪雲の底の平面は、鉛色をした海と平行した【まま】遠のいて行って、水平線との間に、くっきりと一条、青空を残して終っていた。
- (5) 「たまま」(v1+タママ+v2) より、むしろ「たまま」(v1+タママ+ダ。) のほうが、マイナスイメージを伴う割合ははるかに多い。

7. おわりに

今回の内容は、講義中に思いついた事柄をまとめたものである。受講生が提出したデータ分析を中心に述べる予定であったが紙幅の関係もあり触れることが出来なかった。また、「まま」全体の意味用法についても割愛せざるを得なかった。別の機会に譲りたい。

最後に、受講生の、とりわけ岩佐真由美さん、川原田智子さんの講義に対する熱意が本稿執筆の契機となったことを記し、感謝の意を表したい。

【資料】

用例一覧（『新潮文庫の100冊』の昭和33年以降日本人作家による全作品から）

- (1) 世界の. TXT: 耳たぶには例の金のイヤリングがついた【まま】だった。
- (2) 孤高の人. TXT: 二階の彼の部屋の窓が開いた【まま】だった。
- (3) 世界の. TXT: 台所のテーブルの上には獣の頭骨を置いた【まま】だった。
- (4) 世界の. TXT: 彼女は私の腕を両手でそっと握り、私は両手をバスローブの襟に置いた【まま】だった。
- (5) 孤高の人. TXT: 藤橋からスキーはずっと履いた【まま】だった。
- (6) 若き数学. TXT: 目は上下逆様の論文に据えた【まま】だ。
- (7) コンスタ. TXT: こちらのほうは権を動かし、行動の自由があるために錨はあげた【まま】だ。
- (8) コンスタ. TXT: だが、ニコロは、負傷者の治療に当るべきなのに、それがなぜか手につかず、船尾に立ちつくした【まま】だった。
- (9) 冬の旅. TXT: やはり時間は停止した【まま】だ。

- (10) 人民は弱. TXT: 石橋検察官の口は閉じた【まま】だ。
- (11) 聖少女. TXT: 腕はほくの背や首にからみつくこともなくベッドからたれさがった【まま】だった。
- (12) 聖少女. TXT: 六月のなかばから空はつややかに禿げあがった額のように晴れあがった【まま】だった。
- (13) コンスタ. TXT: そのために、ローマ法王が資金を出して調達させた武器や弾薬を満載した三隻のジェノヴァ船は、エーゲ海にあるキオス島の港に釘づけになった【まま】だった。
- (14) 孤高の人. TXT: だが、加藤は天井を向いて眼をつぶった【まま】だった。
- (15) 孤高の人. TXT: 木村は返事をせず、ショートパンツ一枚のはだか姿で畳の上に寝そべった【まま】だった。
- (16) 人民は弱. TXT: 熱心にながながと話す星の話を聞いているのか、聞いていないのか、局長はだまった【まま】だった。
- (17) 孤高の人. TXT: ふたりはまだ決心のつかないように、坐った【まま】だった。
- (18) 孤高の人. TXT: 宮村は雪の上に坐った【まま】だった。
- (19) 孤高の人. TXT: ふたりは這った【まま】だった。
- (20) 孤高の人. TXT: 「それきり眠った【まま】だった。
- (21) 新橋烏森. TXT: 藤本もそれでしばらく黙った【まま】だった。
- (22) 女社長に. TXT: 誰もが、一瞬その場に突っ立った【まま】だった。
- (23) コンスタ. TXT: 二十一歳のなめらかな肌に、いつもはそこはかたとなく血の色を匂わせているのに、その夜のマホメッド二世は、食事にも手をつけず、ただ酒をあおりつづけながら、顔色はいつまで経っても蒼ざめた【まま】だった。
- (24) コンスタ. TXT: だが、この人々も、ウベルティエーノと同じように、息を殺して迫ってくる波を見つめた【まま】だ。
- (25) 孤高の人. TXT: 少女は、どうしていいやら困った顔で、加藤の顔を見詰めた【まま】だった。
- (26) 女社長に. TXT: 尾島の家は、暗く、カーテンも閉めた【まま】だった。
- (27) 聖少女. TXT: それは視線をもたない不透明な眼で、ほくがスカートをチューリップの形にめくりあげるまでずっとみひらかれた【まま】だった。
- (28) 人民は弱. TXT: 事業での信用は傷つき、明朗と活気で手をつなぎあった販売網はずたずたにされ、金融の道は閉ざされた【まま】だ。
- (29) 世界の. TXT: 左側の扉は常に固く閉ざされた【まま】だった。
- (30) 孤高の人. TXT: だが、本沢鉦泉は閉鎖された【まま】だった。
- (31) 孤高の人. TXT: 日の当たらないような、工場の片隅に追払われた【まま】だ。
- (32) コンスタ. TXT: 風は微風、月は雲に隠れた【まま】だ。
- (33) 孤高の人. TXT: 加藤の父は奥の間に寝た【まま】だった。
- (34) 孤高の人. TXT: 加藤は寝た【まま】だった。
- (35) 孤高の人. TXT: 彼は、研修所時代と全く同じ、カーキ色の作業衣を着た【まま】だった。
- (36) 孤高の人. TXT: 木村は会社が終ると、食堂にはいかずに、真直ぐに寮に帰って来た【まま】だった。
- (37) 孤高の人. TXT: 市川と水野は布団の中にもぐりこんだ【まま】だった。

【引用・参考文献一覧】

森田良行 (1989) 『基礎日本語』 角川書店

谷部弘子 (1991) 「副詞的修飾成分「～まま」の意味と用法－話し手の表現意図との関連において－」(『東京学芸大学研究紀要』)

グループジャマシイ (1998) 『日本語文型辞典』 くろしお出版

山田敏弘 (2005) 『国語教師が知っておきたい日本語文法』 くろしお出版

【用例出典一覧】

『新潮文庫の100冊』（1995）に収められている、昭和33年以降に発表された日本人作家による作品名一覧）

- 〈エディプスの恋人. 筒井康隆. 1977〉 : エディプ. TXT
- 〈コンスタンティノーブルの陥落. 塩野七生. 1983〉 : コンスタ. TXT
- 〈ブンとフン. 井上ひさし. 1969〉 : ブンとフ. TXT
- 〈一瞬の夏. 沢木耕太郎. 1980〉 : 一瞬の夏. TXT
- 〈花埋み. 渡辺淳一. 1970〉 : 花埋み. TXT
- 〈華岡青洲の妻. 有吉佐和子. 1966〉 : 華岡青洲. TXT
- 〈錦繡. 宮本輝. 1982〉 : 錦繡. TXT
- 〈孤高の人. 新田次郎. 1969〉 : 孤高の人. TXT
- 〈黒い雨. 井伏鱒二. 1965〉 : 黒い雨. TXT
- 〈山本五十六. 阿川弘之. 1964〉 : 山本五十. TXT
- 〈若き数学者のアメリカ. 藤原正彦. 1977〉 : 若き数学. TXT
- 〈女社長に乾杯！. 赤川次郎. 1982〉 : 女社長に. TXT
- 〈新橋烏森口青春篇. 椎名誠. 1985〉 : 新橋烏森. TXT
- 〈人民は弱し官吏は強し. 星新一. 1967〉 : 人民は弱. TXT
- 〈世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド. 村上春樹. 1985〉 : 世界の. TXT
- 〈聖少女. 倉橋由美子. 1965〉 : 聖少女. TXT
- 〈戦艦武蔵. 吉村昭. 1966〉 : 戦艦武蔵. TXT
- 〈太郎物語. 曾野綾子. 1973〉 : 太郎物語. TXT
- 〈沈黙. 遠藤周作. 1966〉 : 沈黙. TXT
- 〈冬の旅. 立原正秋. 1969〉 : 冬の旅. TXT
- 〈二十歳の原点. 高野悦子. 1969〉 : 二十歳の. TXT